

# 「 地域とともに 」

J A花咲ふくい青壮年部芦原支部 藤田 大介

## ○芦原地区の概要紹介

私達、J A花咲ふくい青壮年部芦原支部の活動を紹介させていただきます。

よろしくおねがいします。

## 概況紹介

J A花咲ふくい青壮年部芦原支部は、2004年3月1日に金津町と芦原町が合併し誕生したあわら市の旧芦原町・芦原地区を中心に活動を行っています。芦原地区は、福井県の北部に位置し、芦原温泉という温泉街を中心に、南は圃場整備の行き届いた水田中心の南部平坦部が広がり、北は“北部丘陵地”と呼ばれる開発整備された畑作地帯が広がる風光明媚な地域です。しかし、農業をするには恵まれたこの芦原地区でも農業の衰退化は著しく、特に北部丘陵地では農業従事者の高齢化、後継者不足による耕作放棄地や遊休農地が年々増大しているのが大きな課題となっています。

こうした問題に立ち向かうべく、近年、少ない労力で作業ができるニンジンや玉ねぎの栽培をJ A主導で進めており年々作付け面積が増えてきています。また行政主導での農業生産企業の誘致が進められており、平成27年にはA E O Nの子会社と提携し、遊休農地での加工野菜栽培がスタートする予定です。この加工野菜の栽培には地元優先の雇用も見込まれることから地域

経済活動の活性化に期待が持てます。

私たち、芦原地区青壮年部は、盟友数46名で、内17名が北部丘陵地の畑作を中心とした園芸農家、25名が南部平坦地の水稻を中心とした専業農家及び農業法人の組合員という構成で活動をしています。また、近年の大きな特徴として親子での2世代加入が増え、現在6家族、13名が加入しています。違う世代間での意見や考えを出し合い青壮年部活動に大きな役割を担っています。

## ○活動の内容

それでは、私たちの現在行っている主な活動内容を紹介させていただきます。まず一つ目として、坂井北部丘陵地の遊休地の解消目的として作付していない農地30aを借り受けてそばの作付けをしています。そばの播種前に青年部員一丸で草刈り機を持ち寄り暑いさなか作業をし、そのあとには懇親会と称し、みんなでバーベキューをしています。汗をかいて作業した後のみんなで飲む一杯は格別です。

さらに収穫したそばは地域の祭りに参加した際、手打ちそばとして振舞っています。私は参加当初、なかなか思うようにそばが打てず苦労しました。しかし、最近では経験を重ねたり、他地区の青壮年部員からアドバイスを受けたりして、人並みに打てるようになりました。こうして遊休地の活用を目的に播いた「種」は大きく育ち、その言葉通り私達青壮年部の活動を通して地域の人たちと交流の輪が広がりました。

二つ目として、年に一回、農閑期の11月に一泊二日で視察研修会を開催しています。農機具工場や生産資材メーカーなどを視察研修し、青壮年部員の知識の向上を図っています。知識を深めたあとは、青壮年部員の交流を深めるため、部員お待ちかねの居酒屋での飲み会です。意外と一番活発な意見が出る場にもなっていますが、この何気ない会話からいろいろな情報や、今後の活動のアイデアが出たり、普段寡黙な部員の新たな一面も発見できたりするので私たちにとって貴重な場となっています。

## ○最近の活動

最近、青壮年部員が集まって話題に上がるのが農協との関わり合いです。私もそうですが、20代、30代で会社を退職して親の農業を手伝い、その流れで農協青壮年部に入部した者にとって肥料や農薬を売っている農協との関わり方がよくわかっていないのです。

農協職員から聞いた話では、農協の事業は、“ゆりかごから墓場まで”、という言葉通り、農協の事業は人が生まれてから亡くなるまでに関係する内容を多岐にわたって取り扱っていると言います。が、若い世代の私たちには具体的に“ピン”とこないことから、『分からないことは直接聞いてみよう』ということで、農協トップの組合長と青壮年部員が本音で語り合える場、『花咲ふくい農業協同組合 代表理事組合長と語る会』を企画しました。

当初は農協に対する素朴な疑問から始まり、今では、今後の農業政策、農協に対する要望や提案などを約1時間という短い時間ながらも活発な意見交

換がされる様になりました。時には、お互いに厳しい意見も出されたりしますが、今後もこの会を続けていき、青壮年部と農協がより良い関係を作れるようにしていきたいと思います。

そして、もう一つ、私たち、部員同士で話中、実は気になっていることがあります。それは、“農協の人って田んぼや畑の事、実はよーわからん者が多いんじゃない？”ということでした。

実際のところはどうか、農協に話を聞いてみると、最近入組する若い職員はサラリーマン家庭で育ち、農業体験をほとんどしたことがない人が多いということがわかりました。これでは、農協で働く職員として農業の事をわかっていないのは“まずい”んじゃない！？と感じ、若手職員と青壮年部員の農業交流を兼ねて『職員の農業体験』をさせてもらえないかと農協の支店長に相談したところ、二つ返事で「ぜひともお願いします」とのことでした。

そこで早速、青壮年部員に連絡をし、段取りをしてもらい、まずはコシヒカリの田植えを入組した農協の新人職員に体験してもらうことにしました。ここでの体験というのは手で植える小学生の田植え体験とは違い、実際に田植機に乗って一般的な田植え作業をしてもらいます。育苗ハウスから苗箱の運搬にはじまり、苗や肥料、除草剤の補充など通常私達が行っている作業から植えるところまでです。作業後、職員に感想を聞くと、「田植機に肥料を入れるのに結構手間取り苦労した」とか、「たんぼの中は歩きにくくて、筋肉痛

になりそう」といった体験作業に関する意見や、日頃、業務の関係上、私たち青壮年部員と接することがほとんど無かったので「色々話することができて楽しかった」、「また来年も参加したい」と言ううれしい意見もありました。一方で、当日、この農業体験に協力してくれた青壮年部員からは、「いつもは、山奥のたんぼを2、3人で静かに作業するだけだが、今日は何人も若い人が集まってきて静かな山奥が賑やかになった」、との声も聞かれました。作業していく中、新しい発見もあり、考えさせられることがありました。それは当たり前に使っていた農業用語が通じないという事でした。その都度作業がストップしてしまうのです。例えば、私たちの地区で補植の事を“ウセ”というのですが、「植え付けていないとこ“ウセ“しといて」、と指示をしても意味が分からず、実際にウセとはこういう事でこうして欲しいということの説明しなくてはいけないのでその点が苦勞しました。

この農業体験は、今まで農業に直接携わったことのない農協職員にとっては生きた経験・知識を学べる場を提供できたと実感しました。そして、この実体験を今後、農協職員が様々な仕事の場面で役立ててもらうことが私達青壮年部活動の励みにもなり、ひいては、農業をしている私達と農協が同じ方向を目指し、より身近な存在になっていくことを希望しています。また、この活動は、これまで主に営農指導員と関わるが多く、他部署の職員とは、ほとんど面識が無い青壮年部員にとって、絶好の交流の場となりました。先程述べた職員からの声の様に、私達にとっても、職員と顔見知りになり農業

以外の事について農協に相談しに行く時も自然と足が運びやすくなった様に感じます。

### ・ これからの活動

これまでの私たちの活動は、遊休地でのそばの作付け、地域の祭りの参加、知識向上の視察研修会開催など、なかば恒例行事的に行っていた感は否めず、何か新たな活動が出来ないかということで、「農協の組合長と語る会」や、「若手農協職員を対象とした農業体験」を企画開催しました。今後は、農業体験を水稻だけでなく、大麦などの畑作、園芸の部員には園芸の体験も企画してもらおうと考えています。しかし、これらの活動は、ひと昔まえまでは、たぶん考えもつかないどころか、農協職員に農作業を体験（教える）してもらうなんて、もってのほか、立場が逆だと反対されるような活動内容ではないかと思います。けれど、これからの農業は、今まで以上に変化を遂げていくと考えます。これまで何度も警鐘を鳴らされてきた、農業従事者の高齢化や米価や青果物価格の下落に加え、最近ではTPPによる農産物関税撤廃問題、農協法の改正などテレビや新聞などで連日騒がれています。正直、私たちにはどうすることもできないような事柄で国の決定に従うほかありませんが、こんな時代だからこそ私たち青壮年部は今一度、私達の地域でできること、今だからこそやらなければならないことを考え直さなければなりません。農業に対する古い考えや偏った見方を変え、いろいろな角度から物事を見つめなおすことが大事だと思います。そのためには、私達、青壮年部や農協がお互

い切磋琢磨し、それぞれの立場で対等に意見や要望を出し合い、私達の地域農業を守り、育てることが使命であると考えます。

芦原地区青壮年部の特徴である、親子世代のさまざまな意見や経験を活かせる活動を今後も出し合いながら地域の発展に貢献していけたらと思います。

御清聴ありがとうございました。